
エナクトメント

精神分析の新しい考え方

スティーヴン・J・エルマン,
マイケル・モスコウィッツ編著
妙木浩之, 津野千文訳

金剛出版, A5判320頁, 5,280円, 2025年11月刊

(あるく相談室京都) **今井たよか**

エナクトメントは、現代の精神分析において非常に重要な概念である。精神分析の鍵概念は、「最初に障壁があり、それを乗り越えるため、治療因子としていく」(妙木, 2023) という歴史の中で育まれてきた。フロイトがヒステリーの患者との仕事から見出した「抵抗」と「転移」も、その次の世代がより重症な患者との仕事から見出した「逆転移」も、初めは治療の妨げと考えられ、時間をかけて治療に欠かせない道具立てに成長した。エナクトメントは、このような精神分析における「妨げ」と「有用性」の逆説の系譜に連なり、上記三つの概念を発展的に継承することを期待されているが、それだけに論争が多く定義が難しい。

エナクトメントという用語を明示した議論が盛んになったのは、セオドア・J・ジェイコブズの『逆転移のエナクトメントについて』(本書105頁)が出版された1980年代後半からである。本書の原書はその流れの中で1998年に出版され、14編の論文が収録されている。編者でもあるエルマンは、第1章をフロイトの臨床を考察することから始める。症例ドラにおいてフロイトが見出したのは転移であったが、エルマンはそこにフロイトとドラの相互作用によるエナクトメントを見る。さらに古典として、アクティング・アウトを扱ったグリーネーカーの1950年の論文と、役割-応答性を扱ったサンドラーの1976年の論文が続く。こうして私たちは、エナクトメント概念の源流を辿ることができる。

後半は、ジェイコブズ論文以降のエナクトメントとの格闘を知ることができる。エナクトメントを論じる時、重要な次元がいくつかあるようだ。それは、「言葉」対「行動」、「失敗」対「治療的」、「患者由来」対「治療者由来」(あるいは「転移」対「逆

転移」)という諸次元である。所収の論文にはそれぞれ臨床素材があり、多くの場合、膠着状態に陥り、何かをきっかけにエナクトメントが気づかれて次の段階が開かれる。「何か」と書いたが、チューズドが子どもとの仕事を通して、エナクトメントは「罪悪感ではなく強い興味をもって受止められるならば」分析過程の一部となりうる(175頁)と述べていることは示唆的である。すなわち、患者が発している既にそこに繰り返し現れているものがあり、臨床家自身がそれに対して何を感じているか、その感じが何に由来するか、患者と自分の間で何が起きているか、そういったことに対して、臨床家が「強い興味(curiosity)」をもち、心を開けば、これまでと違った風景が見えるという過程である。

本書の翻訳はとても丁寧で読みやすく、訳者のお二人のご苦勞に心から感謝申し上げたい。現代精神分析の臨床と理論について、私たち一人ひとりが討論に加わることのできるやり方で理解するために、ぜひ熟読したい本である。

原書: Steven J. Ellman & Michael Moskowitz :
Enactment : Toward a new approach to the
therapeutic relationship

文 献

妙木浩之 (2023) エナクトメントという概念の行為、
精神療法 49(3) ; 323-327.
